

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04570

研究課題名（和文）東北地方における女子ミッション教育の戦後史

研究課題名（英文）History of Girls Mission Education in Tohoku Area

研究代表者

片瀬 一男（KATASE, Kazuo）

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：30161061

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：宮城学院女子大学の同窓生に関するインタビューならびに同窓会記念誌の内容文分析を行った。その結果、同窓生インタビューからは、従来、日本の近代化を支えてきた分離した自己とは異なり、結合した自己ともいべき社会倫理のあり方が明らかになった。これに対して、同窓会誌のテキストマイニングからは、卒業生に3つのコーホートがあり、それぞれに異なる生活倫理が保持されていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ミッション女子教育が、男子教育とは異なる形で日本の近代化に貢献してきたことが明らかになった。またそれは、男性の場合とは異なり、地域社会への参画を通じてなされてきたことが示された。

研究成果の概要（英文）：We conducted interview research on graduates of Miyagi-gakuin Women University and contents analysis of alumnae bulletin.
As a result, we found that they have social ethic of connected self rather than separated self that had promoted Japanese modernization. And also we found there are three cohorts in graduates and they had separate life ethics.

研究分野：教育社会学

キーワード：女子教育 ミッション教育

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者は、2006 - 2008 年度の科研費(基盤研究(c))「明治期の東北地方における女子ミッション教育の社会史」(研究課題 1853039)において、弘前女学校(弘前学院大学)を事例に、明治期の東北地方における女子ミッション教育の検討を行った。女子ミッション教育に歴史的に期待されてきた役割は、実学教育よりも、西洋的教養を身につけさせることにあった。この成果を踏まえて、東北最大の女子大学・宮城学院女子大学の戦後史に注目し、女子大学離れが言われるなか、新たな女子高等教育の可能性を模索することをめざした。

2. 研究の目的

宮城学院女子大学の戦後史を事例に、女子ミッション教育のカリキュラムの変容、卒業コーホートごとの同窓生のライフコース、卒業生が形成したネットワークが地域文化の変容に果たした役割の3点に焦点をしばって女子ミッション教育が地域文化の創造・変容に果たした役割を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の対象となる宮城学院女子大学の戦後における女子ミッション教育の変容を明らかにする一方で、同大学が戦後一貫して保ってきた強固な同窓会文化の持続を可能にした条件を解明するために、ミックストメソッドを用いた。すなわち、女子大学のカリキュラムの分析、同窓会報への寄稿文の計量的テキスト分析、同窓生への聞き取り調査を有機的に結びつけることで、戦後史にミッション女子教育を位置づけ、上記の課題に迫ろうとした。

4. 研究成果

まず、宮城女子大学のカリキュラムの変容に関する分析(天童 2021)によれば、同大学は2015年より、カリキュラム改革の一環として基礎教育科目が刷新され、全学生向けに開講される「MGUスタンダード」科目が具体化した。その特徴と構成は、女性としての生き方を問い、将来の方向性を考える教育科目の充実(キリスト教学、女性と人権、社会保障と福祉など)、大学生、社会人として必要な基礎スキルの修得(基礎演習、外国語、情報処理など)、キャリアデザイン科目の3つの柱である。土台にあるのはリベラル・アーツ(教養教育)重視という同大学の一貫した教育姿勢である、という。

この教育姿勢にみられるように、職業訓練的教育にのみ特化することなく、リベラル・アーツの重視という伝統を保持してきたことは、宮城学院女子大学というドイツ改革派の福音主義のもとに創設されたミッション・スクールの特質といえる。というのは、建学の精神に記された「真理の追究と隣人愛、人類の福祉と世界の平和に貢献する人間(女性)を育てる」との意思是、現代社会が希求する、新自由主義的市場原理の行き過ぎから生み出された「脱人間的不平等社会」に対抗しうる、もう一つの価値の再発見(隣人愛、平和、他者のための共生といった)世界的課題につながるためである。それはケアの倫理というフェミニズム倫理学にも通じる側面をもつ。

幅広い教養と専門的知識をあわせもつ知性、キリスト教主義に基づく人格の陶冶を教育的使命とする限り、昨今の高等教育が陥る過度の教育の商品化、「市場枠組みの大学」(Calogiannakis et al. 2014=2017:370)とは一定の距離をとる教育の場であり続けるだろう。

次に、宮城学院のキリスト教主義的リベラルアーツの伝統が、同窓生においてどのように身体化されているかを明らかにするため、同窓生のライフコースに関する聞き取り調査を行った。今回は、同窓会役員経験者に対するインタビューを行った。その意味では、話者は卒業生の平均的な姿ではなく、同窓生の世界の一面が顕著に現わされた事例といえる。それゆえに、同窓生に見出される生活上の特徴(思想や行動、ライフコース)の一面が明晰に現れる。こうした代表的人物の像は、数こそ少ないものの「理念型」として、同窓生の生活世界を理解する上で手掛かりを与えるものとなる。

そのうち、相澤ほか(2021)では、同窓会を長年支えてきた人たちへの聞き取りから、まず、宮城学院の同窓の縁でのつながり、つきあいを拠り所にした戦後の女性の生き方、それも伝統の枠に収まらない新しい生き方が確認された。この当時、学界のみならず社会でも、大塚久雄や丸山真男に代表され、家族や共同体からの分離によって成り立つ自律した個を理想とする個人主義が注目されていた。これに対して、宮城学院同窓生の事例が示唆するのは、大塚に代表される戦後の個人主義思想の源泉のひとつとなった内村鑑三の無教会主義を含む、近代日本のプロテスタントの宗教圏から、この時代に、大塚や丸山らが打ち出したものとは違うタイプの、戦後の新しい生き方をする女性たちに体现された個人主義が出現していた可能性である。さらには、そうした女性たちの出現を可能にした社会的条件のひとつとして、ミッション系女子教育機関の存在が考えられるということである。

こうした女性たちの生き方を特徴づけるのが、分離ではなく、ネットワークである。いち早く女性のつきあいの世界やネットワークを研究し、その重要性を強調した天野(2012)も、ミッション系女子教育機関とその同窓生の世界を、本格的な研究の俎上にはのせてはいなかった。それ

ゆえに、このようなライフヒストリー研究から、戦後の思想を検討する余地や、女性史、戦後の社会史の空隙を埋める学問的意義も展望できる。さらに、戦後の思想を検討するに際しても、ミッション系女子高等教育機関で学んだ人々の体験やライフストーリーの聞き取りは、思想家中心の思想史にはなかった知見や論点を提示する可能性を有する。

さらに、個人の自律性と自己責任が過度に強調され、ともすれば個の孤立や生きづらさが露わになっている現代社会にあって、支え合いやケアに依拠する個人主義のあり方は、個人のあり方の問い直しという点でも、その現代的意義が社会的にも評価されるものである。

加えて、こうした女性の新しい生き方を可能にしていた社会的条件として、先行する世代の同窓生たちが地域に存在していたことの重要性を確認しておかねばならない。家族、親族に宮城学院の同窓生が存在し、その人たちも宮城学院とそこでの教育、文化的体験についての集合的記憶を共有していた。家族や親族の間での集合的記憶に、同窓の記憶が深く食い込んでいるわけである。こうした人々が、伝統的な地域やイエの世界を、少しずつ変えていった可能性である。しかも、家族・親族に食い込むことによって、宮城学院が同窓生に与えた影響が持続性を見せていることもうかがわれた。以上の点を踏まえ、今後、上記の変化の後に現れた女性や家庭の姿が、学校の創設者である女性宣教師たちが目指した、近代家族的「クリスチャン・ホーム」の理念といかなる連続性と距離を見せているか、これが同窓生全体の傾向、あるいは他の世代の同窓生にも確認されるかどうかといった問題が検討される必要がある。

最後に、片瀬（2021）が、上記の知見を踏まえて、創立110年、120年、130年の節目に刊行された同窓会誌に寄せられた同窓生の寄稿文をテキスト・マイニングによる計量分析を行った。テキスト・マイニングのソフトウェアにはKHcoder（樋口, 2014）を用いた。このソフトウェアは従来のテキスト・マイニング・ソフトの利点を接合することで多変量解析によって分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けけない形で、データを要約・提示する、コーディング・ルールを作成することで、毎時的に理論仮説の検証や問題意識の追求を行う、といった特徴をもつ（樋口, 2014: 19）。分析に先立って記念誌寄稿をその卒業時期によって表1のような3つのコーホートに分けた。

表1 記念誌寄稿者の卒業コーホート

コーホート	卒業年次		寄稿者数
コーホート1	1909-51年	旧制高等女学校・女子専門学校時代の卒業生	24
コーホート2	1952-79年	新制女子高等教育の始まり（二番町校舎入卒業生）	26
コーホート3	1980年-	女子高等教育の展開（桜ヶ丘校舎卒業生）	20

次に寄稿文で用いられた語の頻度から各コーホートを特徴づけたが、コーホートと語の関連の強さを表すJaccardの類似度測度を用いてコーホートを特徴づけることもできる。表4は各コーホートとの関連性の強さから、記念誌3集にわたる語句の付置関係を対応分析という手法で分析し、そのなかで3つのコーホートがどのような位置を占めるか確認した。その結果は図1に示した。

また、3つのコーホート（C1～C3）とその周辺に位置する語を円で囲み、C1からC2を経てC3に至る経路を矢印で示した。

まずコーホート1の周囲には、「礼拝」「キリスト教」「聖書」「教会」「女子」といった女子ミッション教育や、「ピアノ」といった西欧文化に関する語が並ぶ。これに対して、コーホート2の円には「人生」「社会」「家族」「女性」「茶道」など多様な語が入っている。対応分析の散布図の縦軸（第二軸）は主としてコーホート1と2を弁別する軸であるが、語の配置からみて、第二軸+の方向（上）は西欧的・キリスト教的文化・教養を示し、-の方向（下）は日本的・家族的文化・教養を表すものと解釈できる（二軸の一番下には「茶道」がある）。

これに対して、コーホート3の円には「自分」「環境」「経験」などに加えて「英語」「外国」「会社」「仕事」「研究」といった語が含まれる。ここでは英語などを活かして海外で仕事をしたり、教育・研究活動をするといった専門職的なスキルが含まれる。第一軸（横軸）は原点を中心に見ると、このコーホート3をコーホート2および1から区別するものであるから、+の方向（右）に専門職的な女性のライフスタイル、-の方向（左）にキリスト教的文化と家族的文化が位置することになる。以上、記念誌に投稿された同窓生の寄稿文を3つのコーホートごとに分析することで、戦前期から現代にいたる宮城学院の教育一端を明らかにすることができた。

- 相澤出・片瀬一男・遠藤恵子,2021,「戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義」片瀬一男編,2021,『東北の女子ミッション教育の社会史』女子ミッション研究会:93-106.
- 天野正子,2012,『現代「生活者」論 つながる力を育てる社会へ』有志舎。
- Calogiannakis,Pella.et al.eds,2014,*Crisis in education : modern trends and issues* HM, Studies & Publishing, (天童睦子編訳,2017,『教育の危機 - 現代の教育問題をグローバルに問い直す』東洋館出版)。
- 樋口耕一,2014,『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 片瀬一男,2021,「集合的記憶の文化社会学」片瀬一男編,2021,『東北の女子ミッション教育の社会史』女子ミッション研究会:39-50.
- 天童睦子,2021,「ミッション系女子教育にみる知識伝達の社会史」片瀬一男編,2021,『東北の女子ミッション教育の社会史』女子ミッション研究会:71-80.
- Weber,Max,1905,*Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus*(大塚久雄訳,1989,『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』岩波書店)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 片瀬一男	4. 巻 52
2. 論文標題 集合的記憶の文化社会学 宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教	6. 最初と最後の頁 89-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片瀬一男・相澤出・遠藤恵子	4. 巻 53
2. 論文標題 戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義：宮城学院同窓生の生活史の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教	6. 最初と最後の頁 37-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片瀬一男・大迫章史	4. 巻 26
2. 論文標題 明治期の女子教育と私立女子自助館：忘れられたミッション・スクール	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間情報学研究	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片瀬一男	4. 巻 54
2. 論文標題 明治30年代・弘前女学校卒論のテキストマイニング	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 片瀬一男
2. 発表標題 女子ミッション教育の歴史社会学
3. 学会等名 東北社会学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相澤出
2. 発表標題 2つのホームに依る近代個人たち
3. 学会等名 東北社会学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片瀬一男
2. 発表標題 女子ミッション教育の戦後史：宮城学院の事例から
3. 学会等名 宮城学院女子大学 大学開設70周年記念事業プレ企画公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 片瀬一男
2. 発表標題 少女たちのリスペクタビリティ
3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 天童睦子
2. 発表標題 ミッション系女子教育にみる知識伝達の社会史
3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	天童 睦子 (TENDO Mutsuko) (50367744)	宮城学院女子大学・一般教育部・教授 (31307)	
研究分担者	大迫 章史 (OSAKO Akifumi) (60382686)	東北学院大学・教養学部・准教授 (31302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------